

開催地名：神奈川県逗子市	
開催日時	令和5年2月18日（土） 10：00 ～ 11：30
開催場所	逗子市役所 現地開催及びオンライン配信（ハイブリッド講演）
語り部	糸日谷 美奈子 （千葉県千葉市）
参加者	逗子市民 70名 （オンライン聴講 400名）
開催経緯	本市は、逗子湾及び二級河川田越川を有する南海トラフ巨大地震の津波被害想定地域であり、相模湾沿いの最大クラスの地震では想定震度7となるなど、大地震発生時には甚大な被害が予測されることから、東日本大震災発生後には、県から示された津波浸水想定を基に津波ハザードマップの改訂、新たな津波避難ビルの協定締結、年2回の津波避難訓練等を実施し、市民の津波防災意識の向上に取り組んでいる。しかし東日本大震災発生から10年が経過し、津波避難訓練等への若年層の参加率の減少等から津波防災意識の低下が見られるとともに、高齢化が進み、若年層の津波防災意識の維持及び向上が課題となっている。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>東日本大震災が発生した11年前、私は岩手県釜石市立東中学校で理科の教師をしていた。出身は内陸部の奥州市で、釜石市に赴任するまで津波の知識はほとんどなかった。東北地方太平洋沖地震が発生した際に、釜石市の中学生がどのような行動をとったのか、「助けられる人から助ける人へ」をテーマに、今日は皆さんにお話ししたいと思う。</p> <p>（2）東日本大震災について</p> <p>平成23年3月11日14時45分ごろ、震度6弱の地震が発生した。私はその時、校舎の一階にある職員室にいた。教室では帰りの会が終わり、生徒たちは部活動など次の活動に移動するタイミングで、校内にバラバラに滞在していた。地鳴りが聞こえ、地面はグニャグニャ揺れており、渡り廊下が大きくたわんでいた。地震の影響で停電となり、校内放送は利用できなかったため、普段は一旦集合して点呼を取ってから避難するのだが、この時は揺れが収まるとまずはサッカー部の生徒たちが走り出し、続いて校内にいた生徒たちも続いた。</p> <p>最終目的地となる高台のデイサービスセンターの駐車場で海の方を見ると、大きな音と共に砂煙が迫ってくる光景が見えた。災害時、この施設まで逃げることは想定していたが、その先は何も決めていなかったためパニックに陥った。「逃げろ！死ぬぞ！」と叫ぶ声が聞こえて我に返り、避難してきていた小学生や父兄とともにさらに上に向かって走った。波がここまでは到達しないという確認が取れるまで山の上にはいたが、暗くなり始めたので、避難できる建物まで移動する必要があった。開通したばかりの高速道路を歩いて、市内の廃校になった中学校の体育館に移動した。小・中学生と近隣の住民併せて2,000人が、狭い体育館で足も延ばせずに、食事や暖房もなく、仮設トイレが1台外にあるだけで、段ボールを体に巻き付け背中を合せて暖をとり、一夜を明かした。翌日、さらに内陸の中学校に移動し、食料や寝具をはじめ、必需品の提供を受けてようやく安心することができた。携帯電話が不通で使用できなかったため、生徒たちの家族との連絡や情報収集のために、ラジオ局に情報発信を依頼した。</p> <p>（3）釜石東中学校での取り組み</p> <p>東北地方の太平洋側に位置する岩手県釜石市では、明治三陸地震津波(1896年)、昭和三陸地震津波(1933年)という2度の津波被害を受けた歴史がある。また、政府が</p>

ら、30年以内に震度6弱以上の地震が起こる確率が75パーセント以上であると発表されていた。そのため2009年から防災教育を強化し、釜石東中学校では小・中学校合同の避難訓練だけではなく、総合学習の時間を利用して、防災マップの作成、救急搬送や応急処置、水上救助、炊き出し等の学習、安否札1000枚の配布を実施した。この総合学習の講師は、学校の職員ではなく、地域の方々が担った。平日の昼間に地域にいるのは高齢者や主婦、幼児、そして学校にいる小・中学生である。自分の命は自分で守るということ、中学生は、助けられる人ではなく、助ける人でなければならないということ、そして学んだことを地域に伝えるということを総合学習で学んだ。

この大震災で、釜石市では888人の死者と154人の行方不明者が発生したが、釜石東中学校を含む釜石市内の小・中学校では、学校にいた児童・生徒は全員無事だった。これまでの歴史と津波災害の危険性を日頃から学習し、津波でんでんこ、率先避難が浸透していたことが実を結んだのだ。このことは釜石の奇跡として報道されたが、釜石東中学校の生徒たちは、日頃から災害に対してしっかり準備をしていたので、決して奇跡ではないという気持ちを持っている。しかし一方では、自分たちの身の回りを含め、多くの犠牲者が発生した事実もあるので、中学校で学んだことを、もっと地域の人たちに伝えることができたらという後悔の念も否定できない。

(4) 伝えたいこと

後悔しない未来を創るためには、いつ来るかわからない災害の前に準備しておくことが大切である。具体的には、避難場所とそこまでの移動ルート、その時に持っていくもの、避難する手段等々、しっかりと決めておくことが必要だ。できることから、一つでもいいから行動に移してほしい。そして、自分の命は自分で守り、学んだことを地域に伝える姿勢を意識していただき、助けられる人から助ける人になっていただきたいと思う。



開催地より

「助けられる人から助ける人へ」をテーマにお話しいただいた。自分の身は自分で守ることと、低年齢層への災害の伝承について市民に対する啓発を行っていくとともに、後悔しない未来を創るために必要な努力を、当市全体で実施していきたいと思う。